

本から本へ

中学生へ学校司書からのおすすめ本

市川市立妙典小学校学校司書 高桑 弥須子 たかくわ やすこ

去年の秋の日曜参観日のこと。「みんなちはー」と、学校図書館に入ってきた若い女性がいた。一瞬、おや、だれだろって感じがした。「さあ、今年の図書委員はどうですか、ちゃんとやっていますか。」と言葉が続く。その若い女性と見えたのは私服中学生で、一昨年の図書委員長だった。

背が伸び、やわらかい体型になって、まあ、すっかりお嬢さん。彼女は五年生のときから二年間、委員長として図書委員会を支えてくれた生徒だった。リーダーシップを前面に出してみんなを率いるというのではなく、黙って毎日図書館に顔を出す。当番の図書委員たちにも特に指図するではなくそこにいて、当番が来ていなければ自分が当たり前のように当番の仕事をする。学校司書である私自身も積極的に子どもたちと近付き話しかけるタイプではない。来るもの拒まず去るもの追わずの図書館運営ももちろんその根本に一人一人の利用者に応じた最大のサービスをという精神がある。お互いに無口なので会話を楽しむということもなく、静かな信頼関係だった。もしもこの日会わなければ、彼女がこれほど図書館に思い入れがあることを知らないままだったろう。このとき彼女の口から出たこの言葉は、ほんとうにつれい驚きであった。「先生、わたし、今の図書委員の人たちに、ぜひ、伝えたいことがあるんです。図書委員会に入っていて本当によかったということや、この学校の図書館はとても素晴らしいというのをいいたいです。」

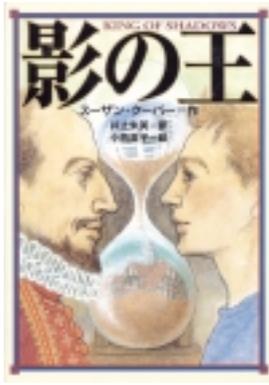
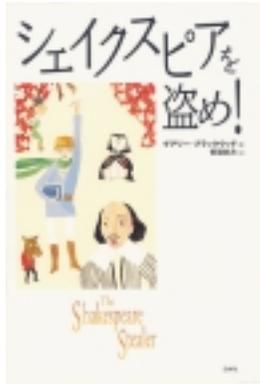
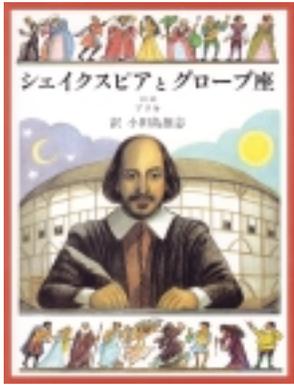
そんなこんなで、中学校の定期テスト最終日に小学校に来てもらい、臨時図書委員会をもつことになった。彼女はかつての物静かさを脇に置き、現図書委員たちに、自分が図書委員として過してこても楽しかったこと、この学校図書館が大好きだということや、熱く語ってくれた。この話の中で、当時、学校司書に紹介してもらった忘れられない本という話が出た。その一冊が『バッテリー』である。

『バッテリー』（あさのあつこ作／教育画劇）

野球をするために生まれてきたような天才ピッチャー功は、周りすべてを圧倒する強烈な個性の持ち主。といってもマッシュコではない。繊細で神経質な孤高の中学生だ。そして引越先でキャッチャー豪との運命的な出会い。「こいつしかない。ぼくたちは最強のバッテリーだ！」とかくチームワークを取りざたされる野球というゲームで、この功は異色だ。試合など、自分の考えどおりにみんなが動いてくれさえすれば勝るといわんばかり。豪を始め、周りの人物も個性あふれる者たちがずらり。大人も子どもも関係なしに人間と人間とのぶつかり合い。さあ、試合の（ほとんど）ない野球小説、プレイボール！ 現在五巻まで刊行中。同様に個性的なキャラクターがぶつかり合うスポーツ小説に『DIVE!!』（森絵都作／講談社／全四巻）がある。

『ぼくがぼくであること』（山中恒作／岩波少年文庫）

功とは違ってかわって、どこにでもいる平凡な小学六年生である秀一。何をやらせても満足にできないというレットルを貼られている。優秀な兄や姉、妹に挟まれて肩身の狭い思いをし、秀才びいきの母親にはにらまれる毎日。あまりの仕打ちに耐えかねて、「家出してやる」と言ったところで頭からばかにされ、冷笑されるばかり。しかし、一旦口に出したからには秀一にだって意地がある。道路わきに駐車していた小型トラックの荷台にもべりこんで家出開始だ。ところがなんとこの運転手がひき逃げ殺人をしたのだ。目撃者となってしまった秀一



は運転手に見つかるわけにはいかない。逃げる！

見知らぬ町のある農家でひと夏を過ごすうち、秀一はいろんな人と出会い、さまざまなことを考える。そして自分の意志で家に戻ったときには、もはや家出前の秀一とは違っていた。

殺人事件や埋蔵金など山場たっぷりの読み物である。一九六〇年代の作品の復刊だが、家庭や教育の問題は今も同じ。占いやいじめ問題にからむ『こんばんは たたりさま』（理論社）など、山中恒よみもの文庫（理論社）の他の作品も読んでみよう。エンターテイメント小説でありながら自分のあり方を考えるだろう。

『シャーロット・ドイルの告白』（アヴィ作／茅野美と里訳／偕成社）自分を問うことはいつの時代でもだれでも直面する大問題。だが昔は「個」をしばる手かせ足かせはあまりにも多く、考えることすら許されない時代もあった。そんな中でしっかりと己を見守った少女がいた。

時は十九世紀。重役令嬢シャーロットは、帆船でアメリカに向かうことになった。ところが何かがおかしい。シャーロットが乗る船の名を口にする、港の男はたちまち逃げていく。さらに、シャーロットといっしょに航海するはずだった一家の姿も見えない。乗客はシャーロット一人のまま船は出帆した。ここで彼女を待ち受けていたものは陰謀と策謀。何も知らず何もできないお嬢様が、凝り固まった因習を一枚一枚破り捨てていく。そして、これぞどんでんがえしのおもしろさ。それも二重二重にー

『影の王』（スーザン・クーパー作／井辻朱美訳／偕成社）

時さらにさかのぼって十六世紀。ナットがある朝目覚めたら、そこはやわらかいベッドではなく、見知らぬ部屋のわらを詰めたマットレスの上。ナットは四百年も昔のシェイクスピアの劇団に、タイムスリップしてしまったのだ。トイレはバケツに用を足し、すんだら窓からザアツ。道路わきにはおびただしい汚物の山。喧騒、悪臭、これがロンドンだ。不潔で粗雑で野蛮な生活へのとまどい。現代（いや、未来か？）から持ちこしている心の傷。ナットはただ劇団員として演ずるしかない。

シェイクスピアはナットがタイムトラベラーだということを知らない。しかし偉大な人というのはどんなときでも、表面に現れたことに目をとられることなく、その人の本質を見抜くものだ。彼はナットの悩みの核心に一気に切りこんできた。それよりナットは温かい慰めをもたらされることになる。このシェイクスピアの人となりも、ナットといっしょに体験しよう。その時代にその地で生活するということと劇団のしくみがわかる。

さらにシェイクスピアといっしょに過ごしたい人は『シェイクスピアを盗めー』（ゲアリー・ブラックウッド作／安達まみ訳／白水社）を、もう少しグローブ座を知りたい人は当時のロンドンと演劇界を絵で紹介する『シェイクスピアとグローブ座』（アリキ作／小田島雄志訳／すえもりブックス）をどうぞ。レンタルビデオ屋では「恋におちたシェイクスピア」を見つけられるかな。